

積極果敢に攻撃して、粘り強く完走する。すると。

2008_0221

スプリント賞とは

よほど個人タイムトライアルに強い選手を除いたら、リーダージャージを着用できると夢想しても良い選手の数は、参加者全体の中で1ダースもないはずです。チームのエースがリーダージャージを狙うことの出来るチームも限られた数になります。それ以外のチームにとっては、完走を目指すだけ、うまく行って4位くらいに入賞したい……。

完走するために、おとなしく走りたい。うまく行ったら4位になるかもしれないので、集団についてゆくようにしたい。リーダージャージに関係するアタックには必ず反応して、逃げを作らせない。自分からはアタックをかけることはしないが、アタックには、大集団を引き連れて追いつきたい。アタックに反応して、大集団から飛び出しても、少人数の先頭交代には加わらなくて、大集団に戻るようにする……

こんな事態が続いたなら、主催者と実況放送のアナウンサーは失神してしまいます。

まるで、日本の高校生の試合ですよ。

主催者と実況放送アナウンサーは、積極果敢な試合を希望しています。コースプロフィール、道路幅員、スプリント賞といった、試合の骨格は試合主催者が決めることができます。試合主催者は積極果敢な試合をする選手に有利になるように、試合の骨格をいじります。どこに山岳を入れるか、どこでスプリント賞を設定するか、どこに狭い区間を入れるか。選手の実力を試す場所をどこに入れるか、どんな入れ方で、どのような賞を贈るかで、主催者の考え方が示されます。

2days race in 木祖村の主催者は以下のように考えております。

1. 試合を前半から活性化したい。どんどんアタックをかけて、逃げ集団を作って欲しい。
そのためには、前半から、上位4選手までのポイント賞を複数回設定しています。
2. ポイント賞は積極的にアタックする集団に有利なような場所に設定する。
ゴール地点は上り坂頂上に設定していますが、ポイント賞はダム堤体の末端に設定しています。
ポイントを取りに行った先頭グループが、ポイント後再び集団で逃げ続けるように。
上り坂頂上にポイント賞を設定すると、逃げ集団が、ポイント賞を契機に分裂しやすいからです。
3. 先頭から周回遅れになるまで走れる。
前半のポイント賞でエネルギーを使いきっても、ゴールにさえ届けば、ポイント賞表彰です。
ツールあたりで、ポイント賞の選手が、アルプスを失格ぎりぎりでも通過するのと、同じです。
自身は、もっと早く上げるアシストマンたちも、ポイント賞の選手に合わせて、ぎりぎりでも通過します。
ゴールまでの平坦区間でポイントジャージが一人で向かい風を受けないためです。
ポイント賞リーダージャージを単独にしない、するのはチームの判断です。

2007ポイント賞展開

あらかじめ予約が入っていたかのように、ステージ1A8. 5km個人タイムトライアルはスワコレシング小坂選手が新記録で圧勝。個人タイムトライアルにも1位2点、2位1点のポイントが与えられています。ステージ1Bは、黄色のリーダージャージは小坂選手。小坂選手が2枚目のポイント賞リーダージャージを着

用できないので、個人タイムトライアル2位の大塚選手が、緑色のポイントリーダージャージです。

上位3選手に与えられるポイント賞がステージ1Bでは前半24km、33km、42km、51km通過時の4回与えられます。ステージ2では同様に前半24km、33km、42km、51km、60km通過時の5回与えられます。個人タイムトライアルの2点、1点はポイントリーダージャージを誰が着用してステージ1Bをスタートするかを決めるだけだと、理解できるポイントの与え方です。

ステージ1B 22km地点平林選手、遠藤選手、松永選手3人のアタック。集団の中で個人総合成績最上位は平林選手で+22秒。大集団はタイム差が2分くらいになるまでは、容認するはずで、実際に容認されました。

協力して逃げ続ける先頭集団とある程度のタイム差で抑えたい大集団の間で、じわじわとタイムを広げて、縮める展開が続きます。大集団先端で、奇妙なけん制は入らないので、大集団も安全に走行できます。大集団の先頭が安定しているので大集団も安全に走行できます。

予定通り、3回目のポイント賞終了で逃げ集団のペースが落ちます。逃げ集団に追いつく形で、個人総合成績に関わるアタックが決まりました。この決定的な逃げは3分03秒のタイム差で逃げ切りました。ポイント賞に関わった選手は、ほとんどが無事大集団で完走しています。ポイントリーダージャージは遠藤選手。

ステージ2 15km地点遠藤選手、田端選手、他8人のアタック。集団の中で個人総合成績最上位は遠藤選手で+55秒。大集団は30秒差程度で泳がせていたようです。

この時点でポイント賞総合は2日間とも逃げ集団に乗っている、遠藤選手。ポイント賞リーダージャージがポイントラインを先頭で通過するのを見るのは気持ちいいものです。そして、全てのポイントが終了して、大集団から、総合成績に関わる逃げが発生しました。同時に、大集団が崩壊しました。ポイント賞は一旦、成績が出ましたが、完走することが条件になります。

完走さえしたら表彰台、アシストをつけるか

ポイント賞リーダージャージが大集団から遅れたのは、残り距離60kmです。完走が条件のポイント賞ですから、チームキャプテンは判断を迫られたと思います。個人総合に関係する選手が集団に残っている状況で、1名でも大集団に残しておきたいはずで、ポイント賞リーダージャージを単独で走らせることを選択しました。ポイント賞リーダージャージの持久力ならば、残り距離単独で走りきれると判断したのかもしれませんが。

結果は、残念ながら、残り20kmで周回遅れ失格になってしまいました。もし、アシストマンを一人ポイント賞リーダージャージにつけていたならば、走りきることが出来たかもしれません。

ポイント賞総合の賞金は個人総合成績の6位相当の賞金です。チーム全体で獲得する賞金額を確実に増やそうとするならば、アシストマンを1名、完走を保障するためだけに、ポイント賞リーダージャージに伴って大集団から下げることも、選択肢にひとつだったかもしれません。チームキャプテンの判断です。

完走さえしたら表彰台、諦めないで走り続けるか

ポイント賞リーダージャージが大集団から遅れた後、ポイント賞総合2位の選手は大集団にぶら下がり続けました。が、ついに、残り15kmで大集団から遅れてしまいました。ポイント賞総合2位の選手のチームも、アシストマンをつけないことを選択しました。単独走行となったポイント賞総合2位は僅か15kmほどで大きく集団からおくられてしまいました。かろうじて、ゴールラインに到着したのは、2分6秒遅れです。ゴールラインのある頂上まで上ってきたら、そのまま、表彰台に上る破目になりました。が、ゴールラインを通過したので、ポイント賞リーダージャージは田仲選手のものになりました。諦めないで走り続けた結果でしょう。